



西尾に「あったらいいな」を市民の妄想で描く一コマ川柳。

投稿募集

西尾に「あったらいいな」ということを川柳にして送ってください。あなたの妄想が一コマ漫画になって新聞に掲載されるかも。採用された方には編集部がジェラートかマフィンをごちそうします。投稿はQRコードからどうぞ。



ROCK on the BEACH2026
2 Days Peace Music festival in Kira

三河湾を望む、吉良ワイキキビーチの美しい自然の中で、最高の音楽を楽しもう！明るい未来の為に、これから生きるヒントをシェアし、音楽と共に平和を祈りましょう！ LOVE&PEACE

2026年5月30sat-31日sun
開催場所：リンクス広場特設ステージ & Cafe goofy (吉良ワイキキビーチ前)
前売りチケット1日 5000yen
前売りチケット2日通し券 8800yen
当日チケット1日 6000yen
今回紹介したお店を含め、西尾市内のたくさんのお店でチケット販売中！
特設サイトはQRコードから



Complians (佐藤タイジ & Ken Ken) / 藤井祐十辻コースケ / Ao-young trio / 光風 & カラムシ a-fank syndicate / Tin roof cat / The SMILE Ship PARADE / あんぽんたんず with Zen
Afro Begue / MAJESTIC CIRCUS / Bobin & Ko-tang / ギターパンダ / 奈良大介 / Maracatu Democrático Nagoya / SCS (self control system)
Go Slowmotion / TERA / Anchobi vibes / 4chez / PAN / U-いつつあん and more...

次号予告 (2026年夏至の頃)

にしがま線の未来を考えることは、この町の暮らしを考えることでもあります。次号では、海沿いの店や小さな商いに目を向け、「この地域で店を続けていくために何かが必要なのか」をいくつかの声とともに考えてみたいと思います。ThreadsとInstagramでも西尾ミライ新聞は情報発信中です。ぜひフォローしてみてください。



THREADS



INSTAGRAM

読者のみなさんの声を聞かせてください

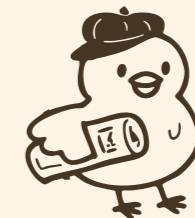
西尾ミライ新聞は、市民の視点から地域の未来を考える小さな新聞です。この記事を読んで感じたこと、にしがま線のこと、この町の未来について思うことなど、ぜひお聞かせください。いただいた声の一部は、次号の紙面で紹介させていただきます。ご意見・感想はGoogleフォームよりお寄せください。スマホで1分で送れます。あなたの声が、次の紙面をつくれます。



西尾ミライ新聞 春分号 (創刊号)
発行人 藤野貴教 発行日 2026年3月20日

西尾ミライ新聞

NISHIO MIRAI SHIMBUN



創刊号

令和8年 春分号
年4回発行予定

市民の視点から未来を考える。Thinking about the future from a citizen's perspective. Pensando o futuro a partir do olhar cidadão.

残す、という選択

名鉄西尾蒲郡線をめぐって、
いま私たちが引き受けなければならない問い



発行のご挨拶 西尾の未来を、ちょっと妄想する新聞。

この「西尾ミライ新聞」は、市民の想像力から未来を考える小さなZINEです。まちは、行政だけが作るものでも、企業だけが作るものでもありません。そこに暮らす人たちが「こうだったらいいな」と思う気持ちや、日常の中の小さな会話や違和感の積み重ねが、少しずつ未来の形をつくっていくのだと思います。西尾には、海があり、抹茶があり、歴史があり、そして面白い人たちがたくさんいます。でも同時に、交通や人口、地域のこれらについて、いろいろな問いもあります。この新聞では、難しい議論だけではなく、くすつと突える一コマ漫画や、市民のお悩み相談、ちょっとしたアイデアや妄想も大事にし



これまでもたくさんの活用促進イベントが努力されてきた

発行人の目

☆☆☆

揺らぐ屋台骨

名鉄が名古屋駅の百貨店周辺再開発で、発注先不在を理由に計画延期となったことは、2025年末の大きなニュースだった。名鉄の看板ともいえる名古屋駅周辺が揺らぐということは、経営の土台が揺らぐということだ。その影響は、赤字路線の整理や廃線という形で現れるかもしれない。名鉄西尾蒲郡線（以下にしがま線）を残そうという市民活動は、いまも続いているが、正直なところ、当の名鉄側がこれからは積極的に続けられる状況にあるのか、市民として不安を感じている。これまでのように「残しましょう」「乗りましょう」という呼びかけだけで本当にいいのだろうか。そろそろ、未来を具体的に構想する段階に来ているのではないか。

☆☆☆

夢だけでは、続かない

2017年に『2020年人工知能時代 僕たちの幸せな働き方』を出版して以降、さまざまな場所で講演する機会をいただいた。西尾市では青年会議所に呼ばれ、ロボットやAIの未来について話し、にしがま線応援団の大会でも話をさせていただいた。当時、私が話していたのは、古民家を活用した民泊のことや、海の家をリノベーションして店を始めた経験だった。強調したのは、「ゼロから新しいものをつくるのは、お金がかかる。それよりも、これまで残ってきた良いもの、良い文化をどう生かすか。できるだけお金をかけずに、人が集まる仕掛けを考えることが大切だ」という視点だった。講演のあと、地元の中学生たちが「にしがま線がこんだったらいいな」というプレゼンを行った。そこでは、有名テーマパークのような施設を愛知こどもの国につくりたい、というような、どうしても多額の投資が前提となるアイデアが並んでいた。

☆☆☆

拍手のあとに、
誰が責任を持つのか

中学生の夢にケチをつけるつもりはなかった。ただ、会場の大人たちは拍手をするだけで、具体的なフィードバックはなかった。私はコメントを求められ、大人として、責任世代として伝えるべきことがあると感じ、こう話した。「みんなのアイデアは、30年~40年前だったから実現できたと思う。でも、いまのこの街、この国には、それを支えるだけのお金がない。人が減ってしまったからだ。あれが欲しい、これが欲しい、というだけでは変わらない。大事なものは、ないものを見るのではなく、あるものを見ること。そして、それをどう生かすかを考えることだ」中学生たちはうなずいてくれた。だが後日、事務局からは「少し厳しすぎるのでは？」という反応もあった。私は、楽観的なシナリオだけでなく、現実を踏まえた選択肢を語ることは大切だと考えていたが、観望を買う役回りを引き受けることの難しさも痛感した。このジレンマこそが、にしがま線の問題を語る際の、最も悩ましい点なのだと思う。ではもし2030年にこの路線がなくなっていたとしたら、私たちはどう動くだろうか。